



立教英国学院通信

第二百六十一号 二〇一二年七月十六日
 発行者 立教英国学院

RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND
 GUILDFORD ROAD, RUDGWICK RH12 3BE
<http://www.rikkyo.co.uk>

創立40周年記念感謝礼拝



祝辞

私たちは源を同じくしている

立教大学総長 立教英国学院理事
 吉岡 知哉

私たちは本日、立教英国学院の創立四十周年を祝うためにこの地が集っています。立教大学そして立教学院を代表して、お祝いの言葉を述べさせていただきます。

歴史を遡ると、立教英国学院と立教大学は共に、一八七四年、アメリカ聖公会宣教師のチャニング・ムーア・ウィリアムズ師が東京築地に建てた小さな私塾「立教学校」をその起源としています。

元号で言うところの明治七年。当時は近代日本の建設期にあたり、後に東京六大学と呼ばれる大学をはじめ、多くの大学がこの時期にその基礎を作っています。これらの大学は、近代日本建設のために直接役に立つ教育を行いました。例えば、大隈重信の早稲田大学は政治家、福澤諭吉の慶応義塾大学は実業家の育成をめざしました。明治大学、政法大学、中央大学の前身は法律学校です。東京帝国大学は、官僚と医者、技術者の育成のために明治国家によって作られました。

「立身出世」「富国強兵」の世の中にあつて、立教大学は少し変わった存在であったと言えるでしょう。聖書と欧米の文化を学ぶ学校として始まった立教大学は、「リベラルアーツ」を中心とした教

養教育に力を注ぎました。「キリスト教に基づく教育」を建学の精神とする立教大学は、何よりも、人間の全人格的な陶冶をめざしたのです。私は立教の精神の中で、現在最も重要なものとして、三つの要素をとりあげたいと思います。

一番目は、「謙虚さ」です。これは、被造物としての人間の限界を知ることであり、絶対的なものの前で人間存在の意味を考へるということとです。「謙虚」という日本語からは、やや消極的な姿勢を思い浮かべるかもしれません。しかし、人間の作り出したものの、既存の制度や価値を相対化するという意味で、それは強さでもあります。ローマ時代、キリスト教が迫害に耐えたのは、まさにその歴史的な例でしょう。

二番目は、一人ひとりの人間、一つひとつの存在の「かけがえのなさ」を大切にする精神です。

そして三番目に、他者への働きかけの意志、ミッションの自覚をあげたいと思います。立教英国学院も立教大学も、まさにミッションの強い意志に支えられて誕生しました。この精神は現在でも、さまざまな課外活動、ボランティアなどの自発的活動として受け継がれています。

昨年、日本は、東日本大震災とそれに続く原発事故によって深く大きな傷を受けました。人間存在の意味、文明のあり方、自然と人間の関係があらためて根本から問われています。私は立教の伝統が培ってきた精神が今こそ大切であると考えて

一 目 次

	ページ
創立40周年記念感謝礼拝	1～5
祝辞	1～4
立教英国学院の歴史を振り返る	5
1学期の行事	2
ホームステイ	6
Japanese Evening	7
イギリスにある3つの茶室	7
球技大会	8
アウティング	9
ウィンブルドン	9
英語科プロジェクト	10
伊藤園お〜いお茶新俳句大賞	10
社会科プロジェクト	11
第8回 チャブレンより	12

います。

歴史を振り返って気付くことをもう一つ申し上げたいと思います。ウィリアムズ主教が日本に布教に訪れたのは、十九世紀の半ば過ぎ。このとき世界は文字通り激動期でした。中国では太平天国の乱、アメリカでは南北戦争が起こりました。ウィリアムズ主教の故郷ヴァージニア州リッチモンドは、南部連合の中心地となり、戦火に見舞われています。ヨーロッパでも戦争が相次ぎ、イタリアやドイツが統一されることになりました。

立教英国学院は一九七二年に創設されました。この時期もまた、激動の時代でした。中国の文化大革命があり、ベトナム戦争とそれに対する反戦運動、学生運動が世界的に拡大したのです。

今、私たちの時代も、情報技術の急速な発達とグローバル化の進展によって、世界の様相が急激に変化しており、その速度は誰も追いついていけないほどです。リーマンショックからまだ四年も経っていないということに、誰もが驚かざるをえません。このような歴史の転換期だからこそ、未来を担う人間を育てることが何よりも大切です。立教大学も皆さまで力を合わせていきたいと思っています。立教英国学院の生徒の皆さん、立教の精神を受け継ぎ発展させてきた立教英国学院で学んでいることに自信と誇りを持ち、志高く、歩みを進めてください。私たちは皆さんを心から応援しています。

祝辞

在英日本国大使館 総領事

今村 朗

本日は立教英国学院の創立四十周年、誠にめでとうございます。これまで子供たちの教育に携わってこられた先生方、学校の運営に尽力されてきた関係者の皆様、保護者の皆様、在校生の皆さんに、心よりお祝い申し上げます。

本日お集まりいただいている卒業生の方々と始めとする皆様方におかれましては、この日を迎えられることは誠に感慨深いものがあると思います。四十年前の一九七二年、このロンドン郊外ギルフォードの地において立教英国学院は、最初、小学部十九名でスタートしたと聞いております。一九七二年といえますと日本は高度成長期が未だ続いていた頃であり、日本企業の欧州への進出もまだ始まったばかりの頃でした。この四十年間で立教英国学院は現在のよう

な素晴らしい設備を備えた小中高一貫校として大きく発展し、日英のかけはしとなつて、各方面で活躍する人材を数多く輩出されてきたことに心からの敬意を表したいと思ひます。また、昨年の東日本大震災に際しては、イギリスの人とともに様々なチャリティ活動に取り組みられたことは素晴らしいことであつたと思ひます。さて、本日は在校生の皆さんに一つお話ししたいことがあります。それは「チャレンジ精神を忘れるな」ということです。皆さんは京都大学の山中伸弥先生のことを知っていますか？「iPS細胞 (induced pluripotent stem cell) (人工多能性幹細胞)」とは、どんな細胞にでもなれる能力を持った細胞のことで、万能細胞とも言われます。病気の人の「iPS細胞」から作った健康な細胞を移植することによって、これまで治すことが難しかった病気でも治すことのできる、素晴らしい可能性を秘めた細胞です。山中先生は実験によって「iPS細胞」を作ること成功したのですが、山中先生が最初の頃に取り組んだ実験は失敗の連続だつたと思ひます。山中先生は若い研究者だつた頃、ある遺伝子が肝臓でたくさん働くとコレステロールが下がるのではな

いか、という仮説を立てて、それを証明するために実験をしました。コレステロールというのは動脈硬化という病気の原因になる物質です。山中先生はマウスでその実験をしたのですが、その遺伝子をたくさん働くようにしたマウスは病気が治るどころか、皆肝臓ガンにかかつてお腹がふくれあがつてしまったそうです。つまり、その遺伝子は病気を治す遺伝子ではなく、ガンを起こす遺伝子だつたのです。実験は失敗してしまいました。しかし、山中先生はここで諦めずに、その遺伝子の働きを更に研究しました。失敗にめげずチャレンジ精神を発揮したのです。するとその遺伝子は、生物がまだ母親のお腹の中にいるときに少しずつ手足や心臓といった様々な細胞に分かれていく、これを分化といいますが、分化のために必ず必要な遺伝子だといふことが分かつたのです。それがきつかけとなつて山中先生はどんな細胞にでもなれる能力を持った「iPS細胞」を作る方法を発見しました。つまり、失敗した実験が成功の元になつたのです。

もう一つ大切だと思ふことは、失敗をバネとして、大きな目標を立てたことです。当時、どんな細胞にでもなれる能力を持つのは母親のお腹の中にある、それも最初の頃だけで、分化が進むとそのような能力は失われてしまうことが分かつていました。しかし、様々な細胞に分化する能力を持った細胞を使うには母親のお腹の中から将来の赤ちゃんになる細胞を取り出さねばならず、赤ちゃんの生命を絶つことになり、問題がありました。山中先生は、どんな細胞にでもなれる能力を持った細胞を、人の皮膚のような普通の細胞から作り出せないか、という目標を掲げたのです。なぜなら分化してしまつた皮膚のような細胞を、分化する前の細胞に戻す、これを初期化すると言ひますが、普通とは逆のプロセスを考えてそれを目標に定めたからです。どうしてそんな大胆な目標を立てることが出来たのでしょうか？山中先生は、その頃、自分がやつていたガンを起こす遺伝子の研究は本当に世の中に役立つのだからかと悩んでいたそうです。そのため鬱病にかかつてしまい、朝もなかなか起きることが出来ず、

研究をやめてしまふ寸前だつたそうです。そのようなスランプから抜け出した時、一度はやめてしまおうと思つたのだから、この際、人が思ひもつかない目標、先生はビジョンと言ひますが、そのような大きな目標を定めて、それに向かつてチャレンジすることにしたということです。

山中先生によると実験というものは十回やつて、やつと一回成功するかしないかだそうです。でも九回失敗しないと、この一回の成功は手に入らない、だから失敗を恐れては決して成功しない、失敗するのは恥ずかしいことではないんだ、若い人たちは失敗を恐れずチャレンジして欲しい、そして大きな目標、ビジョンを掲げてその実現に向けて頑張つて欲しいと言つておられます。

皆さんは幸い、この立教英国学院という素晴らしい環境の中で、しかもイギリスという日本とは異なる文化に触れ、日本に居るだけでは決して得ることが出来ない貴重な経験をする機会に恵まれています。皆さんがそのような恵まれた環境を生かし、多くのことを学ぶと同時に、失敗を恐れずチャレンジすることの大切さを忘れないで欲しいと思ひます。それにより立教英国学院からチャレンジ精神に富み、人類が直面する様々な課題に突破口を切り開くようなたくましい人材が輩出することを願つてやみません。以上をもちまして、立教英国学院の創立四十周年にあたり私よりお祝ひの言葉といたします。本日はおめでとうございます。



【1学期の行事】

4月15日	生徒帰寮、入学始業礼拝
4月16日	健康診断、オリエンテーション
4月17日	高等部実力テスト
4月28日	球技大会
5月3日	午後ブレイク
5月6日	スポーツテスト
5月8日	ブルーベル見学
5月8日～19日	Reigate & Redhill Music Festival
5月11日	Japanese Evening
5月13日	生徒会主催 Guildford ショッピング
5月18日	ロンドンアウティング (H2 以下)

5月27日	TOEIC・TOEIC Bridge の資格試験
5月28日	St. Marry's School 来校
6月2～10日	ハーフターム、ホームステイ
6月17日	第65回漢字書き取りコンクール
6月26～7月2日	期末考査
6月30日	ウィンブルドン・テニス観戦
7月5日	スクールコンサート
7月7日	創立40周年記念礼拝、生徒帰宅
7月7～14日	ホームステイ
7月9～14日	高等部3年生補習

Rikkyo School 40th Anniversary Celebration Speech

～理事兼卒業生代表 8期生須藤達哉（欧州三井住友海上英国支店長）～



Thank you very much for your introduction.

My name is Tatsuya Sudo. I am a graduate of this School. I am also one of the School's Trustees representing all the graduates who now live in the UK. I have been kindly asked by the Headmaster, Mr. Munechika, to make a short speech in English during Rikkyo's 40th anniversary celebration.

When I first joined Rikkyo, this School had just celebrated its 10th anniversary. At that time I gave no thought to what this School might look like 30 years later, and absolutely no idea that I would be standing here saying a few words at its celebration.

It was back in April 1983 when my father drove me to this lovely School for the first time. We had moved from Tokyo to London that year due to my father's new assignment. I was 15 years old and I wore the exact same uniform you are all wearing today. It was a beautiful Sunday afternoon with bright sunshine; a perfect day to go for a drive. However, the purpose of this drive was not for sightseeing but taking me to a boarding school called Rikkyo. As we covered many miles down the A281, I saw the sheep, horses and cows in the lovely peaceful countryside. But I remember

also having a concern; "What kind of school exists in such a peaceful place?"

First impressions were not good. That first evening at Rikkyo, the dinner served to each pupil was a bowl of soup, 2 slices of ham with lettuce, a bag of potato crisps, followed by one green apple for dessert. For 15 years old boy that was still growing, it was obviously not enough to satisfy my hunger and I remember I was starving all night. The dormitory was not a private room as I had hoped; it was populated by 12 pupils. The time you sleep and the time you wake up was dictated by the school. Was this the lifestyle that I would suffer for the next 3 years until graduation? On that first night I remember lying in my bed, hungry and with tears in my eyes, fearing that I would not last for a week before I called my parents to bring me back home.

Three years later, on the very last day at Rikkyo before graduation, I was crying again. However, this time I was crying because I had fallen in love with this School and did not wish to leave. Contrary to my first impression, the lifestyle at this School was a perfect fit for me.

During my three years at Rikkyo, I learnt how to work effectively in teams, how to integrate into the community, how to be a leader, and the importance of complying to rules. These are just a few of the skills I learned at this wonderful School, all of which contributed towards making me the person who I am now. And of course the friends I made here are still one of the most precious treasures I have earned in my life. Rikkyo has been a hugely positive influence to my life, for which I will be eternally grateful.

Of course it was my parents' decision, not my own, to choose this exceptional school. My father, who drove me down the A281 all those years ago, is now 77 years old. He has retired and enjoys playing tennis every day. My mother sadly passed away 2 years ago at the age of 67. I do not recall having ever thanked them properly for making such a good decision about my education. Taking this opportunity I would like to say to my parents "Thank you so much. Your decision was absolutely right. You gave me the most precious educational experience I could ever have."

So, to the current generation of students studying at Rikkyo, I would like to say this; "It is a privilege to spend your school life in such a wonderful environment." Whilst you may not realize that now, I can assure you that when you've grown up and look back on your school days, you'll agree to that statement. I urge you to treasure the experience of studying at Rikkyo, and try to enjoy yourselves during the special years you study here.

As a graduate and one of the Trustees of this school, I feel it is part of my responsibility to be an advocate for the School and inform other people about how wonderful this School is. I hope you will share the same feeling with me when you become graduates of Rikkyo.

My loving school Rikkyo, congratulations on your 40th anniversary. I am extremely proud of being a graduate of this school, and it is truly a great honour to be given this opportunity to congratulate you on this special anniversary. Thank you very much!

From Cllr Leonard Crosbie (ホーシャム市議会議員)

I am delighted and honoured to be here at the RIKKYO School on the 40th anniversary of its foundation.

Over that time the School has sought to ensure the physical, intellectual and spiritual wellbeing of the students in an environment which one parent has described as "providing a family like atmosphere and in which the School never stops improving". I admire the parents and the students who decide to seek education in England...a land so far from Japan.

In these days of globalization, the internet, Google, etc., and with ENGLISH becoming the common language of commerce, aviation, communications and medicine, the School under your Headmaster Mr. Munechika and staff, offer the ideal environment to prepare students for today's challenging and competitive world.

The School's work with local communities is greatly admired and Horsham would be delighted to engage with you in any such activities.

Thank you for your invitation and I wish the School and the students every success in the future.



～立教英国学院校長 棟近 稔～

Mr Akira Imamura, Minister, Embassy of Japan
Cllr Leonard Crosbie, Chairman of Horsham District Council
Honoured Guests, teachers, parents, students and friends of Rikkyo School

I should like to thank you all for joining us today to help celebrate this important milestone in Rikkyo School's history. I should especially like to thank those who have flown from Japan for this occasion. It is lovely to see so many familiar faces, including old friends, old boys and former colleagues.

We are honoured to have the presence of the Consul General from the Embassy of Japan, the Chairman of Horsham District Council, both the President and Vice President of Rikkyo University, President of Rikkyo Womens College, Rev Martin King and Rev Canon Nigel Nicholson, Headmasters of Rikkyo Ikebukuro, Koran Jogakuin, Teikyo School, and Japanese School in London, representatives from St Catherine's and Millais Schools among others.

This has been a year for celebration: Her Majesty The Queen's Diamond Jubilee, the Olympic Games in London. And today we celebrate our School's 40th Anniversary.

Rikkyo School was founded in 1972 by the first headmaster, Yasushi Agata, with the idea of educating the children of Japanese parents working abroad, in both Christian and Japanese traditions.

It was the very first Japanese private school outside Japan. At that time, nobody dreamt of starting such a school outside of Japan. I cannot help but admire Mr Agata's foresight, courage and determination. When the School opened its doors in 1972, there were just 19 primary school children. At that time, the School looked very different to today – with only the current girls dormitory (we still call it the main building) which had to be used for accommodation, classrooms, dining room as well as staffroom and office!

I first came here in 1977 – the year when the School celebrated its 5th Anniversary, and the Queen celebrated her Silver Jubilee! I used to live in that main building next to students, and was often woken up by the smell of frying bacon wafting from the old kitchen! Over the years, the School has had its ups and downs. While Mr. Usuki was the headmaster, the School expanded and the many buildings we can see

today were built through generous donation from many Japanese companies. Now we have well over 2000 alumni working all over the world.

Last month, we welcomed a former graduate who visited the School from Japan. He is now a representative of a Japanese cosmetic company and was visiting the UK to oversee his company's European expansion. He told me that one of his long-standing ambitions was to see his product displayed in Debenhams in Guildford – and he had just fulfilled that ambition!

Today we have 147 students, and I am happy to add that two of them are second generation Rikkyo School students.

Last year we experienced the terrible disaster in Japan. I would like to take this opportunity to express our sincere gratitude for the kindness of the local community who contacted the School with messages of sympathy and many who gave their support following the disaster. It reminds me quite vividly not only how much this School has been supported by the English people for these 40 years but also the importance of our school's existence in England being a bridge between English and Japanese people – a legacy from its founder who declared the School as being for the "mutual friendship and understanding of our two nations, Great Britain and Japan".

Today, the importance of the bond between nations, the bond between people is far greater than 40 years ago.

As we move into the next decade of the School's history, Rikkyo School must continue to act as a bridge between two nations and two nationals. I am proud that our



School is firmly established within the local community: our annual Open Day is always well attended; and we hold an annual Japanese Evening for pupils and parents from local schools as well as Friends of the School. Our students also help with local fundraising activities. Many of our students also have the opportunity of staying with local families, giving them the chance to experience English life and to practice their English. Just some examples of how our School is working to develop cultural awareness and understanding between our two nations.

In a world of increasing globalization, I believe it is our mission to produce the next generation who can work in harmony together, in a future world. Our School's achievements are due to its dedicated teachers and staff, and in no small measure, to the strong support of its Trustees, parents and friends, many of whom are here today.

I am confident that Rikkyo School will continue to grow from strength to strength, and I should like, once again, to thank you all for joining our service of thanks and celebration today, and for your continued support.



チャペルにて執り行われた記念感謝礼拝

～立教英国学院の歴史を振り返る～

写真中央：小泉純一郎元首相（1979年）



イギリス総選挙の視察に、
小泉純一郎元首相が立教英国学院を訪問！



現在の新館ドミトリ-32は
かつて教員室であった！



体育館を建設中

イーストハウス 2階



しばらく教員寮であったイーストハウスが
今年度、高3女子寮として復活！

1972年

開校（小学部19名でスタート）
のち、中学部・高等部開校

1977年

英国教育科学省より Independent School
として認可

1978年

文部省より初の在外教育施設高等部とし
て指定を受ける
チャペル・男子寮（新館）落成

1985年

新食堂兼講堂（New Hall）落成

1986年

新チャペル、教室棟落成
ウェストハウスを女子寮として使用開始

1992年

創立20周年記念コンサートを London,
Queen Elizabeth Hall にて開催

1993年

体育館／教員室・図書館棟／新教室棟落成

1994年

GCSE Science コース導入

1995年

理科実験棟落成

1997年

創立25周年記念コンサートを London,
Queen Elizabeth Hall にて開催

1999年

400メートル全天候型陸上競技場完成

2002年

武道場落成

2006年

8面の全天候型テニスコートを整備

2007年

創立35周年記念コンサートを London,
Wigmore Hall にて開催

2008年

2面の天然芝サッカーグラウンドを整備

2009年

生徒会使用するハットを建替

2012年

イーストハウスを女子寮として使用



岡野先生が上空から撮った本校の写真(1979年)

昔、高3の臨時ネクタイが存在した！



左写真：青の臨時ネクタイ
右写真：現在も使用してい
るネクタイとエン
ブレム

1986年完成の教室棟に
新教室棟を増築



新教室建設中

教員室にある生徒用のPCが充実！



現在の教員室



イギリスの家庭で過ごす1週間

ホームステイ

1週間の休みであるハーフターム中に全校生徒の約 2/3 がホームステイ。あちこちでダイヤモンド・ジュビリー(女王即位 60 周年)のイベントが開催されていました。



学校を出発し、ホームステイ先へ移動

一年間の英語勉強の成果

中二 長島 花怜

私は、今回のホームステイが二回目でした。一回目は中一の夏休みでした。その時はまだ英語が上手に話せず、自分がしたいことや食べたい物、行きたい場所を言うことができませんでした。だから、いろいろなことが出来ずつまらないホームステイになってしまいました。でも今思えばこれは良い経験でした。なぜなら、このホームステイでもっと英語が話せるようになったと思うようになったからです。それからたくさん勉強して E.C の授業もいつもよりまじめに受けました。

そして今回迎えたホームステイ。私は今まで頑張ってきた英語の成果が出れば良いなと心の中で思っていました。ステイ先の人々が迎えに来てくれた時に、少し英語の話し方がこわく、聞き取れなくて不安でした。でも、日付が変わっていくにつれてどんどんステイ

イ先の方が何を言っているのかがよく分かってきました。そして一緒にその家庭に行ったりと、行きたい場所をステイ先の方に言う「OK」と言ってくれて、いろんな所へつれて行ってくれました。自分たちが食べたい物をわざわざ買いに行ってくれたりもしました。

前回のホームステイと比べて、今回のホームステイはとても充実していたなと思います。理由はただ一つで、自分の気持ちをステイ先の方々に伝えることができたからです。全ての成果は出すことができました。私がこのホームステイのために勉強したたくさんさんの単語と文法を使うことができ、そのおかげで今回のホームステイがとても楽しいものとなりました。次にホームステイする時は、さらにもっと英語を上達させてステイ先の方々といろんなことを話して、日本の文化のことなど教えたいです。

幸せだったホームステイ

中三 松田 祐理子

ハーフターム。どれだけこの一週間の休暇が楽しかったことか。その一週間はあっという間に過ぎていった。楽しくて楽しくて本当に幸せだった。この一週間は私は忘れたいと思う。

私はハーフタームの間、立教の近くのユーハーストという所にホームステイをした。土曜日の午後、私達はホストファミリーに連れられて、ステイする家に到着した。小さいけれども雰囲気温かく、一目見て好きになった。ビークンという犬もいた。とても警戒していたがすぐ慣れてくれてほっとした。イギリスはこの時、エリザベス女王のダイヤモンド

ド・ジュビリーだった。ステイ先の方はダイヤモンド・ジュビリー関係のものに沢山連れて行ってくれた。女王の記念日を皆で祝う。日本では考えられないようなことだ。本当に皆が女王を愛していると分かって、この国の温かさに感動した。もう一つ驚き、感動したことがある。イギリスの人はよく笑うのである。ある日、私達は雨の中、皆で散策をした。私は雨で、疲れてどよんとしているのに、ステイ先の人やその友達に常には喋って笑顔を絶やさない。私を見ると「笑って、笑って！」と言ってくる。こんな状況でこんなに笑って楽しそうにしているのを見て、私は驚きを隠せなかった。明るくて、温かい。小さなことは気にしないおらかさも持っているのがイギリス人なんだと感じた。

今回のホームステイをして、私は明るい人々に囲まれていたのを感じ、それに感謝している。皆で笑って、皆で楽しむ。これはどんな国籍であっても一番分り合える方法であり、幸せをつくる秘訣だと思う。それを体験できて本当に良かった。



ホストファミリーと写真を撮る高1男子生徒



日本の文化を英語で伝えたい！

Japanese Evening



地元の学校の生徒たちやイギリス人の方々をお招きして、日本の文化を紹介し、楽しみながら交流しようという趣旨で始めた行事。あやとりや剣玉、折り紙、茶道、剣道などの日本の遊びや文化を紹介します。

「自分からチャンスをつかむこと」の大切さ
高—— 山本 茉友

正直に本心を言うと、「絶対調だった。」
立教に来て初めての交流イベントで、緊張していたけれど、私はこの日が内心楽しみだった。

私は、地域交流委員だった。先輩に声を掛けて頂いた時、自分でも驚くくらい元気に「やります！」と言ったのをよく覚えている。高校で英語の力に自信を持てるようになりたいと思っていたので、本当にやる気は人一倍あったつもりである。

こうして私は、地域交流委員として、日本文化のプレゼンテーションをすることとなった。テーマは「針なしホチキス『ハリナックス』」。たまたま友人にもらった物があつたから、それを見て面白そうだから、これはどうかと提案してみたのだ。結局提案はそのまま通った。多分、ちよつとドヤ顔になる気分だった。

さて、そのように見つけた日本文化を発表する直前、絶対どこか変な汗をかきぐらい、私はもの凄く緊張していた。山口先輩が挨拶して、和服の紹介があつて、和服の最後はまた山口先輩で……と考えていたら、出番がきた。後のことは、本当によく覚えていない。けれどプレゼンテーション終了後、何人かの人から話しかけられ、ハリナックスについて何度か話をした。ハリナックスが相当興味深かったのか、実際にその場で注文して買ってしまった人もいたので驚いた。でも一番は、英語でした説明を理解してもらい、それを種にして会話することが出来たことが驚きだったし、嬉しかった。

このイベントで、私は「自分からチャンスをつかむこと」の大切さを感じた。地域交流委員に入ることを決めたのは、結局自分の意志だし、Refreshmentの時間に英国人に声を掛けたのも自分である。ナルシスト感たっぷりだが、受け身でいるだけではないと痛感した。自分からやろうとするからやる気も出るし、それこそ英語を組み立てるのも「絶対調」になる。今回学んだことは、高校での英語力アップの第一歩として心に留めておきたい。これからも「自分から」という挑戦を続けていこうと思う。



イギリスにある3つ目の茶室

昨秋、立教英国学院に茶室がやってきました。ひょんなことから裏千家ロンドン出張所から頂いた「ヴィクトリア&アルバート博物館の倉庫に眠っている茶室を引き受けませんか」というお話。完成を待っていた茶室がとうとうお披露目を迎えたその日は Japanese Evening でした。当日は裏千家ロンドン出張所の先生がお越しくださり、お話と共に貴重なご指導も受けることができました。「今イギリス国内にある茶室は3つです。1つがロンドンの大英博物館（日本展示室の和英庵）、2つ目がオックスフォードのアシュモリアン博物館、最後の3つ目がこの立教英国学院です。」

本校の茶道具には、卒業生の方や香蘭女学校などからご好意で寄付頂いたものが多くあります。紙面を通じて心からの感謝を申し上げます。海外にあってこれほどととのった環境でお茶を学ぶのは稀有なことです。この茶室とともに、稽古で培われる心を大切にしたいと思います。



Japanese Evening にて茶道の紹介

最高の球技大会

高三 田塩 なつき

これを読んでいる先生方、聞いて驚かないで下さい。私、田塩なつきは今回の球技大会は八回目でした。小五で立教に入ってから初めての球技大会、高三の先輩が大キャプテンというものをやっている姿に本当に憧れました。その時の私は、まさか自分が高三までいると思っていなかったもので、大キャプテンになるなんて思っていませんでした。しかし、高三の三学期、球技大会の話が出てきた時、すごくかつこよかった高三の姿を思い出して、自分も大キャプテンをやろうと思いました。

大キャプテンは自分が思っている以上に大変な仕事でした。学校の半分の生徒に応援歌を教えたり、後輩達を盛り上げたり、本当にやりがいのある仕事でした。私はバスケのキャプテンとしての務めもありました。青組の女子バスケは高三が私一人だけで正直プレッシャーに押しつぶされる事がたくさんありました。だけど、チームの後輩達の私への熱い眼差し、期待、信頼、これは今でもずっと忘れません。試合は前半も後半も負けてしまいましたが、悔いのない試合だったし、皆楽しんでくれたのが何よりも嬉しかったです。今回の球技大会、忘れてはいけないう事があります。それは「友情」です。青の男子バスケの島垣君には本当に感謝しています。最初はお互いの意見がたぐさ食い違いケンカばかりして、後輩の足を引っ張るような事が多かったけれど、練習とともに皆の持ち前の明るさが「友情」を深めていった

と思います。試合に負けて泣いてしまった私を誰よりも先に励ましてくれた島垣君、彼の優しい心は一生忘れません。球技大会、最後は負けて終わってしまったけれど、決してかつこ悪い事だとは思っていません。むしろ、こんなに頼りない大キャプテンについて来てくれた皆一人一人が、かつこ良く見えるし、最後まで諦めずに全力でプレーした皆一人一人に私から勝利のトロフィーをあげたいくらいです。試合の審判をしてくださった先生方、私を心の底から励ましてくれた後輩、本当に感謝しています。



全体競技で応援する生徒たち

「ウェーイ！」

中一 塚田 泰成

サッカーの試合開始後、相手チームが一点を入れたときの歓声が今でも耳に残る。私は、守備中心のプレーが目標で

あった。しかし、相手チームの人にすぐに抜かれてしまう。悔しくて、何度くらいついても、抜かれる。それがショックだった。

一試合目は一対四で負けてしまった。しかし、ここで立ち直らなければ、二試合目にもひびく。昼食後、必死で作戦を立てた。

そこで、思わぬ困難が立ちわだかまる。それは、左サイドバックから、ゴールキーパーへの突然の交代である。でも、受け入れるしかなかった。

驚きでボーッとしていると、一試合目のある情景が浮かんだ。それは、自分のチームのゴールキーパーが負傷して、出られなくなったときに、積極的に、

「おれがゴールキーパーをする。」

と言った先輩の顔である。

そして、その情景からさまざまなことを学んだ。まず、物事の最悪の状態を心の中でイメージして、臨機応変に行動していくこと。どんな時、どんな状況でも全力で取り組むこと。さらに、試合後も学ぶことがあった。それは、相手に感謝し、試合の勝敗について長く引きずらないことだ。実際に、球技大会が終わった時、

「ナイスキーパー。」

「ありがとう。」

などと相手チームの人々が言ってくれた。その場面から感謝することを学び、両チーム写真と一緒に撮ったりもした。結果は二試合とも負けてしまったが、私はもともとと努力をし、先輩相手にたちうちできるような頑張っていた。

また、先輩と協力する事、スポーツマンシップのつとり、勝負することの楽しさ、悔しさを味わえたので良い経験となり、心のノートの中にその悔しさ、楽しさが刻まれた。



球技大会

赤と青の2チームに別れ、全体競技、バスケットボール、バレーボール、サッカー、ソフトボール、ポートボール、ドッジボールの種目が行われました。





ロンドンで学ぶ！

アウティング



自然史博物館の実験室でスタッフに質問

五月十八日（金）、高二以下の生徒はロンドンへミニアウティング（遠足）に出かけました。

今回、高一はワークシートを中心に大英博物館を見学。高二はテムズ川をクルーズする船上から、ビッグベンやロンドン・アイを優雅に眺めた後、ロンドン塔の中を見学しました。

小・中学生の行き先は、ナチュラール・ヒストリー・ミュージアム（自然史博物館）。中に入ると、まずはエントランスで待ち受ける巨大な恐竜の骨に圧倒されました。そして、世界各地からここを訪れる人々、またいろんな制服を着た他校の子どもたちに混じって、立教生の班行動がスタートしました。今回は、理科担当のイギリス人の先生の引率で、英語のワークシートを用いて、「『霊長類』と『恐竜』について問題に答えながら見学して回りました。また、実験室でイギリス人スタッフの説明を聞きながら、見たことのないような動物や植物、化石や岩石などを『実際に見て、触ってみる』。研究者になった気分、疑問を持った点を、パソコンや資料で調べたり、スタッフに質問することで解決していききました。

REDゾーンという火山や地震をテーマにした展示では、阪神淡路大震災の様子を再現したコーナーもあり、イギリスに居ながら日本の地震について考えるきっかけになったのではないでしょう。博物館は大変広く、見たいものを全て見られなかった生徒もいたようですが、それぞれ思い思いに楽しんでいました。



毎年恒例のテニス観戦

ウィンブルドン

テニス発祥の国、イギリスが誇るウィンブルドン・テニストーナメント。朝4時半に起床し、全校生徒で試合を観戦。なかには、有名選手のサインをもらう生徒も！

あの有名人と会えるなんて夢のよう！

高一―二 小林 史佳

待ちに待ったウィンブルドン。芝生で二時間ほど並んで競技場に入ると、私たちはまず対戦表に目を向けた。お目当てはもちろん錦織圭。しかし、彼の試合はナンバーワンコートで、私たちの所持していた金額では入ることができなかった。私たちの班のメンバーは皆、錦織選手を目当てにしていたのにコートに入れないというのはとてもショックだった。試合を見たいという思いを捨て切れなかった私たちはナンバーワンコートから離れられずにいた。そこで、階段の下でジャンプをしてみたり何とかして一目でも錦織選手を見ようと頑張っていた。そんなとき、私たちの熱い思いが伝わったのか、

「Come here!」

と優しい警備のおじさんが私たちを休憩中だけコートに入れ、写真を撮らせてくれた。テレビの中だけでは見たことのない錦織選手を見たというだけで私は大満足だった。しかし、逆に、あんな有名人と自分が同じ場所にいることが信じられなくて、嘘のように感じた。普段テニスはあまり興味が無い私でも錦織選手を応援するのはとても楽しく、二十八ポンドのタオルを買ってしまうほどだった。残念ながら錦織選手は負けてしまったが、前回のアウティングと同じ班のメンバーで行動した今回のウィンブルドンは私にとっても

だ楽しく、心からいい思い出と思えるものとなった。そんな素敵な思い出を作る手助けしてくれた班のメンバーと警備のおじさんに感謝したいと思う。

英語科 プロジェクト

現地の学校である St.Mary's School より小学生 25 名が来校しました。
EC の授業で立教生が剣道や書道などの日本文化を紹介。
EC 主任の Mrs. Sharp からレポートが届きました。



剣道について英語で説明

A VISIT FROM ST. MARY'S

The morning of Monday May 28th was very busy for Rikkyo students as, during their EC lessons, they played host to twenty-five children from St Mary's primary school, Shackelford.

Our students had prepared a number of activities to entertain their visitors and we started with a tea ceremony, performed by H1 students, in the tea house. When asked who would like to take part in the ceremony, lots of St Mary's students eagerly put their hands up, and their teacher chose two volunteers who then had the opportunity to taste the tea and sweets.



ダブルダッチを小学生に紹介

After this, we headed to the Kendojo where our students talked about Kendo and showed the children the clothing and swords. There was also the opportunity to see some beautiful kimonos which were on display. The next part of the morning's activities were spent in the library where the H2 students had set up different stations to show the children how to draw Manga pictures, how to play Kendama and Koma, how to count and write to 10 in Japanese, how to write their names in Japanese characters and, outside, there was even the opportunity to try Double Dutch skipping.

St Mary's spent the final part of their visit with the primary and middle school students who taught them how to use chopsticks, how to play Cat's Cradle and how to make origami birds and flowers. The children also enjoyed playing Fukuwarai, and were happy to be interviewed by a number of M2 students who had spent time in their EC lesson preparing questions. Thankfully, the weather was good and the sun was shining which meant that

the pupils and teachers from St Mary's were able to enjoy a picnic lunch in the school grounds. They sat in the shade of a large cedar tree and after eating, spent 15 minutes playing happily before the coach took them back to their school.

It was a very successful and enjoyable visit for Rikkyo and St Mary's. Our students were able to share their language and culture whilst having the opportunity to practise and improve their English speaking; St Mary's had a morning full of new experiences and the opportunity to meet students from a different country.

A week after their visit, we received an envelope full of 'Thank you' cards which the children had made themselves. They said how much they 'would really like to come again' and how they thought it 'was all fantastic.'

In the EC department we look forward to organising more events like this so that our students get every opportunity to use and improve their English skills.

From Mrs.Sharp

「伊藤園お〜いお茶新俳句大賞」で都道府県賞を受賞

『待ちぼうけ ふと見た道に ひめつばき』

俳句はとっても短い。その短い文章にどんな思いを込めるか、どんな言葉を使うか。それを考える機会を与えてくれる『お〜いお茶俳句コンクール』は私にとって1年に1回の楽しみであった。

特に賞品が欲しいと思ったことはなく、ただただ目を瞑った時に広がる情景・思いを必死に自分の持っている少ない単語で表すことに夢中になっていた私は、今回都道府県賞に選ばれたことに驚き、同時にとても嬉しく思っている。

『待ちぼうけ ふと見た道に ひめつばき』

これが私が今回賞を取ることでできた作品である。実際に、まだ私が日本に住んでいた時に体験し感じたことを、ありのままに俳句にしたものだ。最初、どうしても冬に関連した言葉を入れたかった私は、電子辞書でそれを検索していた。機械的にボタンを押し続けていた私の前に、突然ある言葉がふと目に入ってきた。『ひめつばき』である。ひめつばきの写真を見ていると、私はある事を思い出した。

私が昔住んでいた日本のマンションの傍につばきが咲いていた。ひめつばきではないだろうが、その色は赤く鮮やかで、それなのにいつのまにかはらりと落ちていたそのはかなさに、私はよく心を奪われた。友人を外でぼおとして待っている時、ふとそのつばきを見てしまうと、本当はこれを見るためだけにここへ来たのではないかと錯覚してしまうほど見惚れてしまったものだ。

その情景が脳裏にはっきりと映った私は、すぐさま筆を取ってこの俳句を書いた。この俳句から、あの美しくはかないつばきを思い描いてもらえたら幸いである。（高3 久保 友香）



五月十六日の午後、毎学期行われている恒例の英語科・社会科合同フィールドワークが行われました。今回の目的地は、学校から車で三十分程、ギルフォード近くにあるナショナルトラスト『ハッチランズ・パーク』です。

ここにあるお屋敷、オーナーの趣味で「あるもの」がたくさんコレクションされているとのこと…。そんな予告を聞いて、一体何がコレクションされているんだろう？とわくわくしながら出かけた、中二の十九名の生徒たち。

まずはパーク内の屋敷の前で、ガイドの方からイントロダクションを聞き、早速ワークシートを埋めていきます。

中に入り、真っ先に飛び込んだのは、たくさんの絵画と「ピアノ」。ここには、総計四十台ほどのピアノやハープシコード、オルガンのコレクションがあり、今回は全部で六つの部屋を見学します。ワークシートにはそれぞれの部屋のポイントやタスクが書かれており、その一部と、中二の反応をご紹介します。



ガイドの方に質問をする中2の生徒

◎ 絵画室では…

『フランス革命で有名な人のピアノを見つけよう！』
その人物は…『パンがないならケーキを食べればいいじゃない』という言葉で有名。

『マリー・アントワネットのピアノがあるの？！』皆、大はしゃぎで探します。

◎ 大広間では…

『ハープシコードを見つけよう！』
『ハープシコードって何だ？』わからず部屋にいるガイドの方に尋ねます。

『これとこれだよ。』といって紹介してくださった二つのハープシコード、蓋をあけると美しい絵が描かれていました。

この部屋には大理石でできた机や、たくさんの絵画もありました。

◎ 図書館では…

『シェイクスピアの肖像画を見つけよう！』

さすがに有名人だけあって、生徒たちはすぐに発見することができました。

この部屋には、歴史上の人物の肖像画が多数あり、一人一人、この人物は誰？と調べることができました。

◎ 食堂では…

『変わった形のピアノを見つけよう！』

『普通のピアノしかないよね？』部屋をきよるきよる見回すと、部屋の端のほうに半月形のテーブルのようなものが。

『まさか…』

蓋をあけると、鍵盤がありました。これはハーフムーン・ピアノと呼ばれる、この屋敷の中でもとても珍しい形をしたピアノの一つだそうです。

◎ 音楽室では…

『ショパン、リスト、モーツァルトなどの肖像画を探そう！』

この部屋にはオルガンが設置されており、現在もコンサートなどに使用されています。ガイドの方のご好意で、なんとオルガンを弾いてもいいとのこと！

ピアノを習っている生徒の多いこのクラス、僕が！私が！と取り合いをしながら、しばしオルガンの音色を楽しみました。

今回のフィールドワーク、引率の教員たちになにより驚いたのは、ピアノの数でもピアノの形の珍しさでもありません。

イギリスの歴史を知る！

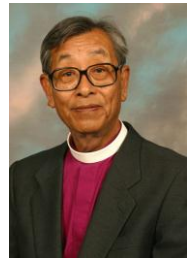
社会科 プロジェクト



ハッチランズ・パークのお屋敷の前にて

中学二年生は、ちょっとした待ち時間や見学の途中で、ガイドの方をつかまえては、「あの机の素材は？」
「この近くのもうひとつのお屋敷のオーナーは？」
「オーナーの職業は？ えっ無職ですか。」
まだ英語の勉強を始めて一年、文法や単語など知らない部分も多い彼らですが、物怖じすることなく英語で話しかけ、たくさんの情報を得ようとしていました。

チャプレンより



高野主教は立教英国学院の学校付き牧師です。礼拝や聖書の授業には、様々なお話を下さいます。

今日を生きる

高野 晃一

イエスさまの山上の説教に、今日を生きるという教えがあります。「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。(マタイによる福音書第六章三十三―四節)」

若い頃私はこの教えがよく分かりませんでした。むしろ将来の計画を一生懸命たてて、その目標に向かって現在は一生涯努力することが大切と考えていました。だから、明日のことまで考えるなどというようなことが理解できませんでした。

少し分かってきたのは大分後のことです。牧師になって間もなく、英国のカンタベリーの神学校で一年間学ぶ機会が与えられました。キリスト教というと、日本では今でもやや西洋の宗教という感じがぬぐえませんが、カトリックの井上洋治神父さんと作家の遠藤周作さんは若いころフランスに渡りました。そして「日本人の心情と感性でイエスの教えをとらえなおさないかぎり、決して日本にキリスト

教は根を下ろすことはない。(井上洋治)」と考え、日本に於けるキリスト教とは何かを求め続けました。

私も同じような経験があります。英国の神学校で日本は仏教の国だから、当然仏教については知っているとわれ、良く仏教について質問されました。しかし、大学では英米文学科で学んでいた、普通の英国の人々より英米文学についてはよく知っていました。ところが仏教の教えについては全く知りませんでした。そこで、日本に帰ってから日本人の心の源とも言える「万葉集」と、「聖徳太子」を始め、主として色々な日本の大乗仏教について学びました。

学んだ一つに禅の正受老人の教えがあります。普通の住職のようにお寺に住むのではなく、自然の美しい信州の飯山でお百姓のように畑を耕して生活をしていました。物を作り育てる大切さと喜びを自らの修行にしていました。今も飯山に昔の農家のような素朴な庵が残され、私も訪ねたことがあります。

この正受さんの言葉があります。「今一日暮らす時の勤めをば励み努むべし。如何ほどの苦しみにも一日とおもえば耐えやすし。楽しみもまた一日を一日と思えばふける事もあるまじ。一日一日と思えば退屈はあるまじ。一日一日を勤むれば百年千年も勤めやすし。一大事と申すは今日ただ今の心なり。それを疎かにして翌日あることなし。」私が先のイエスさまの教えを僅かでも実感を

持つて理解出来るようになったのは、かえってこの仏教の正受さんの言葉に接してからです。

この立教英国学院の一日は「朝の礼拝」から始まります。その中に「天の父永遠にいます全能の神よ、今朝までわたしたちを無事に過ごさせて下さったように、今日一日もみ手のうちにお守り下さい。罪におちいらず、危険にもあわず、たえず主の導きにより、み心にかなう行いができますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。」という、お祈りがあります。

今年には新入生が多いのでこの学期の初めに礼拝に就いて話した際、この一日一日を大切に生きることを話しました。私自身は毎朝このお祈りを祈るたびに、今日一日を充実して生きる大切さを自らに言い聞かせるように、このお祈りを祈っています。一日くらはよいと油断すると、それが習性となって毎日本当は手抜きの生活を送っても、それにさえ気が付かないことになりす。今日一日を一生懸命充実して生きようと勤めれば、一日のこと自体は小さくとも、それが生涯積み重なると考えれば大きなものに成ると、この年齢になってから分かりました。だから学生たちには今それを何らかの機会にこれを繰り返して伝えていきます。



小／中学部／高等部入学試験

【小学部5年／中学部1年 2013年4月入学】

出願期間：2013年1月10日～1月18日

選考期日：2013年1月27日

【高等部1年 2013年4月入学〈A日程〉】

出願期間：2012年10月1日～11月30日

選考期日：2012年12月15, 16日（英国受験、校内1泊）

2012年12月16日（日本受験）

【高等部1年 2013年4月入学〈B日程〉】

出願期間：2013年2月1日～2月8日

選考期日：2013年2月17日（日本受験）

被災地中学生・高校生との交流

7月19日（木）より、本校とケンブリッジ大学でのサイエンス・ワークショップが始まります。今年も昨年に引き続き、福島・宮城などの被災地域から4校の高校生と教員が来英し、一緒にワークショップを行います。

また、8月4日（土）には、日本オリンピック委員会の要請で、本校の生徒たちが被災地の中学生とともに女子トライアスロンの日本選手の応援をします。

今年は本校創立40周年、下記の通り記念コンサートを行います。

ご都合がよろしければ是非お越し下さい。

40周年記念コンサート：11月17日(土) 午後3:00 ロンドン St.John's Smith Squareにて

(詳細につきましては eikoku@rikkyo.w-sussex.sch.uk までお問合せ下さい。)

メールマガジンご希望の方はホームページの (www.rikkyo.co.uk) 「メールマガジン配信登録」から登録ができます。

立教英国学院通信を電子配信に切り替えたい方は、infodept@rikkyo.w-sussex.sch.uk までご連絡下さい。